

野町 啓著『初期キリスト教とギリシア哲学』

昭和47年3月，創文社刊，272頁

泉 治 典

本書は、野町氏が東京教育大学大学院を修了後現在に至るまでに発表された多くの論文の中から、表題に直接関わるものをまとめて成った論文集である。全体は9の章と1の補論より成る。1. フィロンの歴史的背景。2. ギリシア哲学へブル起源説。3. 創造と教。4. テロスと神。5. 創造と悪。6. 創造と必然性。7. 自愛と他愛。8. 初期キリスト教とギリシア哲学。9. 「輪廻転生」と「復活」。補論『ティマイオス』(28B7) 解釈史ノート。

野町氏は「あとがき」の中で、本書は「拙い思想史の落穂拾い——Spicilegium——にすぎない」と謙遜しておられるが、spicaの語はひときわ輝く星座の星をも意味すると、ここに言いそえるのをお許しいただきたい。まことに氏の研究は、思想史の真の源泉、真の頂点に達しようとする真剣な営みであり、そしてこの領域に深く没入する研究は、我が国にはこれ迄ほとんど見られなかったと言わなければならないだろう。著者はこの書において、キリスト教が神学として体系化して行く過程を、それが、ギリシア哲学を摂取し、再解釈して行く過程としてとらえるのであるが(p.225)、そのために例えばTheaitetosなりTimaiosなりの特定の箇所を解釈史をたんねんに追跡し、またそのためにこの分野での従来の研究を徹底的に洗い直しているのである。すなわち、Dodds, Theiler, Wittらを始めとして、Courcelle, Dörrie, Ivánka, Pépin, Rist, Kremerらの諸研究を批判的に取上げているが、そのさい特にPhilonの学説と解釈を重視することによって、アリストテレス以後の古代末期の哲学史——特にPlatonismの歴史にたいしてキリスト教の側から見る視点を与え、その結果、例えば中期プラトニズムと新プラトニズムとの差異・関係といった、これまで論議が充分にとどかなかった問題にたいして、大きな光を投げかけているのである。野町氏はこのことを、キリスト教の側からする古代末期哲学史の「倒叙」(p.269)と

いうように考えておられるが、これによって実に力強い一貫性をこの時代の全体に与えていることは、ただ驚嘆あるのみである。

本書の各論文は、この歴史の流れが明らかにされる仕方で配列されており、野町氏はこの点で哲学史家としての厳正な学問的態度を堅持しておられるが、いま指摘した「倒叙」ということは、キリスト教の登場こそ、古代哲学の偉大と悲惨を共に真底から露呈せしめる出来事であったことを、その内実として含むのである。古代末期の哲学史は、決して一方通行でも、二つの体系の混合や混和なのでもない。その過程は、キリスト教とギリシア哲学の断絶点なり対立点が次第に自覚されてくる過程であって (p. 255)、具体的に言えば、ケルソスのような——また順序を別とすればポルフェリオスのような——キリスト教に真向から対立した論者がいなかったならば、プロティノスにおいてあのような形でギリシア哲学の本領を自覚し、あのような形でそれに終焉をもたらすこともなかつたらうと推測されるのである。もとよりこれは実証の域を超える部分をふくむとは言え、この事態を見る野町氏の眼はこの上もなく澄み、かつ巨大な歴史の伝統に遭遇して少しもたじろがない確かさを保持されている。キリスト教が登場した古代末期の歴史は、実に決戦場であって、断じて中途半端な混合物ではなかった。氏は「創造と悪」「創造と必然性」などの、のびきならぬ問題をたずさえてここに出陣するのである。

論文のテーマは大別して二つに分かつことができよう。一つはアリストブロスとフィロンに始まり、初期の教父たちに受継がれる歴史的自己理解であり、いま一つは主として創造をめぐる進展する思想的自己理解である。前者は後者のいわば *Sitz im Leben* を提供するものであるが、野町氏が最初に着手した研究は、フィロンの *Apologetik* の歴史的背景 (cap. 1) であり、さらに遡ってアリストブロスにおけるギリシア哲学へブル起源説 (cap. 2) であり、この問題はさらに cap. 8 でユスティノスのソクラテス観をめぐる続けられている。著者は歴史的に発生した *Apologetik* の、それぞれの時代における実際の意義・機能の相違を明らかにする必要からして、第一にディアスポラのユダヤ人活動の特に活発であったアレクサンドリアにおけるユダヤ人ポリテウマの組織をとりあげている。これについてはパウル・カーレの *Cairo Geniza* によるアリストアス書簡を用いて、ヨセフォスの記事の信憑性を検討し、結論的にはヨセフォ

スよりもフィロンの証言を重視して、ポリテウマが旧約の神の民の伝統に従ったところの、とりわけ第二神殿建設以後のユダヤ教の伝統に従った宗教団体であったことを主張する。それは宗教的機能を本質とするものであるが故に、政治的には極めて不安定であり、やがて人頭税徴収その他が具体的契機となって、内部的に民族主義か市民的同化かの対立に導かれることになる。著者は排他と同化のこの対立を、Tchericover (Hellenistic Civilization and the Jews) の検討をつうじて解明し、フィロンの立場はⅢ Macc. とは反対の同化の立場にあり、アレゴリーによる旧約の解釈を手段としてユダヤ教を普遍化させるに至ったことを明らかにする。続いて、ギリシア哲学へブル起源説、ないしはギリシア哲学旧約借用説をアリストブロスとフィロンについて検討するが、これについて著者は、前者が後者に依存するという通説をしりぞけ、また前者の断片を伝えるエウセビオス自身の意図と構成を排除することによって、アリストブロス自身がおかれた時代状況とユダヤ人社会の構造をはっきり取り出している。かのオリゲネス——キリスト教の大衆宗教化を急速に進めると同時に pneumatikoi の集団を形成して来たるべき大規模な迫害にそなえた——の徒たるエウセビオスとの時代の差異は無視されてはならないのである。アリストブロスの行なう弁証は対外的であるよりもむしろ対内的であり、従ってへブル起源説は二次的であったが、この点はフィロンにおいても同様であって、フィロンがモーセと律法の優越性の誇大表示に批判的であったとする野町氏の指摘は、十分に納得のいくものである。この二人によってむしろユダヤ教のギリシア化が促進させられるが、それはユダヤ教がギリシア哲学へ吸収されることではなく、むしろ律法を σοφία として究極目的化し、 φιλοσοφία をそこへ至る道として位置づける「階梯化」(p. 60) である。この階梯化は、直接的な自己主張ではないが、なお一元化を志向するものであり、その志向の中で各時代のプラトニカーとキリスト教との深奥部における対決が行なわれることになる。これについては他の一群の論文において明らかになるが、われわれは、このような論点の見事さに対して、またそれを定めるまでの氏の並々ならぬ努力に対して、驚嘆の目を見張らずにはおられないだろう。

へブル起源説は後2世紀以後のキリスト教迫害が強まると共に本格化して現われる。そのさい、唯一の真理はキリストによってのみ啓示されたという前提

があり、ユスティノスはこの前提をきわ立たせるために、悪霊による「対抗啓示」を主張したことが指摘される。それはキリスト教をめぐる神話とロゴスとの戦いでもあり、新約宗教のロゴス性の自覚に由来する戦いである。しかし野町氏がいくつかの箇所、これらの考えはユダヤ教とキリスト教の独創ではなく、当時の新ピュタゴラス主義その他にも見られるものであると指摘している点は、きわめて周到である。

著者の第二の問題は、プラトンにおけるイデア界と現象界の関連、Theait. 176 B の *ὁμοίωσις θεῶν*、さらに創造の一回性・時間性やデミウルゴスとイデアの関係をめぐる Timaios 解釈などを基軸に展開される諸問題、一口に言って存在の階層化と神についての問題である。だがここでも、アリストプロスやフィロンなどユダヤ教内部に始まるギリシア哲学との折衝が後の哲学史に対して持つ意義は重大である。最近の Armstrong (ed.): The Cambridge History of Later Greek & Early Medieval Philosophy, 1967 においても、この点は殆んど顧みられていない。そこで著者は cap. 3 においてこの問題にいどんでいる。それによると、アリストプロスの *ἔβδομος λόγος* の解釈は、*ἔβδομος* と *λόγος* をいわばシノニムのように考え、しかもその *λόγος* を宇宙秩序の表出として把握したものである、とされる。それは人間の *νοῦς* といった狭い意味に解されてはならず、またアリストプロスをフィロンに従属させる従来の見方は訂正されなければならない。すなわち、創 2, 2 の哲学的解釈の根底にあるものは、心理学的なものではなく宇宙論的なものであり、それによって存在の階層化をうながすことになるのである。古代末期の哲学史について Semitism, Orientalism を無視してならない一つの証拠が示されている。フィロンにいたると、明瞭にプラトニズムとの交流があり、その結果、イデアを神のノエシスによるノエマタと見て、それを神の中に位置づけることが起こるが、*ἔβδομος λ.* = *φῶς* とする解釈からして、神は一定の属性や規定をこえる最高のもの、存在の第一原因であるといわれ、それによって存在の階層化が明確に成立することになる。ここで野町氏は、この考えが新ピュタゴラス的発想につらなるものであるとして、5 世紀のマクロビウスの *Commentarii in Ciceronis Scipionis* をとりあげるが、そのさい、Schmekel, Prächter, Courcelle のようにマクロビウス (さらにカルキディウス) をポセイドニオスの Timaios-Kommentar に還元させる推定をしりぞけ、最近

のKrämer, Burkertに従って、古アカデミーにおける数論と存在論の結合が、新ピュタゴラス主義と新プラトン主義をとおって、フィロン——マクロビウス——カルキディウスを結びつけるのだと結論づけている。

これらの十分な準備の後に——それ故以下のことは主観的な唐突さを一切ふくまない——、中期プラトニズムのアルピノスによる *ὁμοίωσις θεῷ* の解釈が扱われる。それは一つのテロス求めてプラトン哲学を単純化し一元化する試みであるが、著者はさらに進んで中期プラトニズムと新プラトニズムとの相違を明らかにするに至っている。後者においては、存在の階層化に依じてテロスそれ自体の階層化、すなわち内在化が行なわれるが、プロティノスはテロスを同時にアルケーとすることによって、アルケーとテロスの円環的結合を行ない、神の超越性のいわば尖端においてその内在化を遂行したのである。(ここで附言すれば、テロスとアルケーの結合はプロティノスがフォアソクラティカーを重視したことから来ると指摘されてよい。)

野町氏は、新プラトニズムにいたってキリスト教との断絶点は動かしがたいものとなると見るが、その根はじつに深いのである。すでにプラトンの後期の宇宙論的傾斜がそれを準備しているが、それは一口に言って神と人との絶対的な断絶 (p. 116) であり、また大宇宙を前にして、或いは大宇宙の中にあって自己を否定して行く中心喪失 (p. 208) である。そこで、悪の起源、創造ないし流出の必然性、自己愛、魂の輪廻といった問題は、まさにギリシア哲学がキリスト教との断絶を深めるに至ったものであることが、cap. 5 以下で詳細に論ぜられている。それらの各章についての紹介は省略させていただかねばならないが、cap. 6 の「創造と必然性」について見ると、創造の根拠を示す *quia bonus* (Deus) と *quia bona* (creata) のアナロジー (cf. *De civ. Dei* XI, 24) はキリスト教の側にもギリシア哲学の側にも共通して認められること、さらに神の意志 (*quia voluit*) に創造の根拠をおく見方も同様であって、共に *Timaios* に原型が見出されること、それゆえ *quia voluit* と *quia bonus* とを自由と必然のような対立概念でとらえようとする解釈 (例えば *Cousineau*) は当たらないことが指摘されている。(ギリシア倫理学の主意主義的傾向については p. 203 の註24にある。) そこで問題は、すでに cap. 4 「テロスと神」で示されたように、存在の階層化が両者の側において前提されているが、それにも拘らず創造をたんに logical な説明とし

でだけ語るか、それとも歴史的事実として語るかの差異にあり、この差異が決定的な対立点となるのである。著者はBegriffとLehreの差異をここに認め、信仰の事実の意識化、概念化には妥当性と限界が問われざるをえなかったのだと言う。

以上、大急ぎで断片的な紹介に終わったことをおゆるし戴かねばならないが、最後にもう一度言えば、野町氏が基督教とギリシア哲学の相違点を鋭く示しているのは、決して一面的な視点とか、体験を認識に対立させる態度とかによるのではない。それは歴史的传统の差異についての深い認識に由来し、またその重さが氏の研究を駆り立てているのである。それは特定の観点や態度からの断定ではない故に、この帰結は歴史的に開放的であり、より深くより広い研究へと開かれているのである（わたくしの考えでは、アンセルムスにおけるアナロジーとパラドックスの統一に、これらの問題の行きつく所が示されると思う）。そこで氏自身が考えておられるように、今後グノーシスその他をも含めて——そのさいには新約の伝統や、G. v. Radの最後作Weisheit in Gsraelsなども顧みられようし、また、新プラトン主義のティマイオス解釈がアウグスティヌスによってどのように受容されたかもさらに詳しく論ぜられよう——いっそう広汎な哲学史の叙述を完成されるか、それとも特定の思想家についてのモノグラフを完成されるかが期待されるが、いずれにせよ研究の確実な基礎をここにすでにえられていることに、深い敬意と共鳴の喜びを表明したい。